

# 療育の変遷と今後の方向性

鴨下 恵子

## 1.はじめに—研究の方法と目的—

「療育」という言葉は1942年に高木憲次によって提唱されてから、時代の流れとともに療育の対象とする子どもや考え方が大きく変化してきた。そして今も新たな療育の形が求められている。どのように療育に対する考え方が変化し、また現在ほどのような療育が行われており、今後どのような療育が必要とされているのかを知りたいと考え、本研究に至った。

研究方法は療育の歴史の変遷を文献からまとめて、これまでの療育に関する制度や取組から考え方の変化を考察し、愛知県での療育の現状をインターネットで分析し、そこからみえてきた課題に先進的に取り組んでいる療育センターへ取材に行き考察した。

## 2.療育の先駆的な取組

### ・さくら・さくらんぼ保育

1956年「社会福祉法人さくら保育園」園長斉藤公子によって行われ、日本で最初に統合保育をした園。人類の発達に焦点をあて、発達の道筋を科学的に学び、保育に取り入れた。

<さくら・さくらんぼ保育の特徴>

### ・自然豊かな保育環境

### ・描画とリズム遊びによる発達の観察

・全身運動、腕、足腰を使う畑仕事、床ふき、動物の飼育、ふとんのあげおろし、のこぎりを使っての薪切りなどの労働

### ●もの木保育園と子ども発達支援センター桃っこへの取材

現在もこの保育を取り入れ保育を行い、さらに就園前の障害児を対象に療育を行っている岡崎市幸田町に存在する園

上記で述べた保育の特徴のほかにも療育方法として「ロールマット」「腰湯」が取り入れられていた。

→療育を障害があるから行われるものではなく、こどものよりよい発達、充実した幼児期を過ごすために誰にでも必要なものだと考えている。生活の中に療育が一体となることで、療育が特別なものではなくすべての子どもがいきいきと輝ける1つの方法であると感じた。

## 3.療育の歴史の変遷

### ・1970年代の療育

「乳幼児健診1974年大津方式」の導入→療育機関の受診の低年齢化・療育対象の拡大、障害の多様化→療育機関が対応しきれない→療育の場を拡大（幼稚園・保育園の統合保育への歩み）（保健師・発達相談員配置など）→障害幼児への支援制度化や法律の整備

### ・1980年代の療育

1980年国際障害者年を契機に障害者に対する捉え方の変化→

障害幼児の生活を重視した身近な療育が求められる

→地域ごとの取組が重要視される

→療育機関の不足も踏まえ、医療、教育、福祉機関が連携した総合施設の創設へ（北九州市立総合医療センター・鹿児島療育センター）

・1990年代の療育

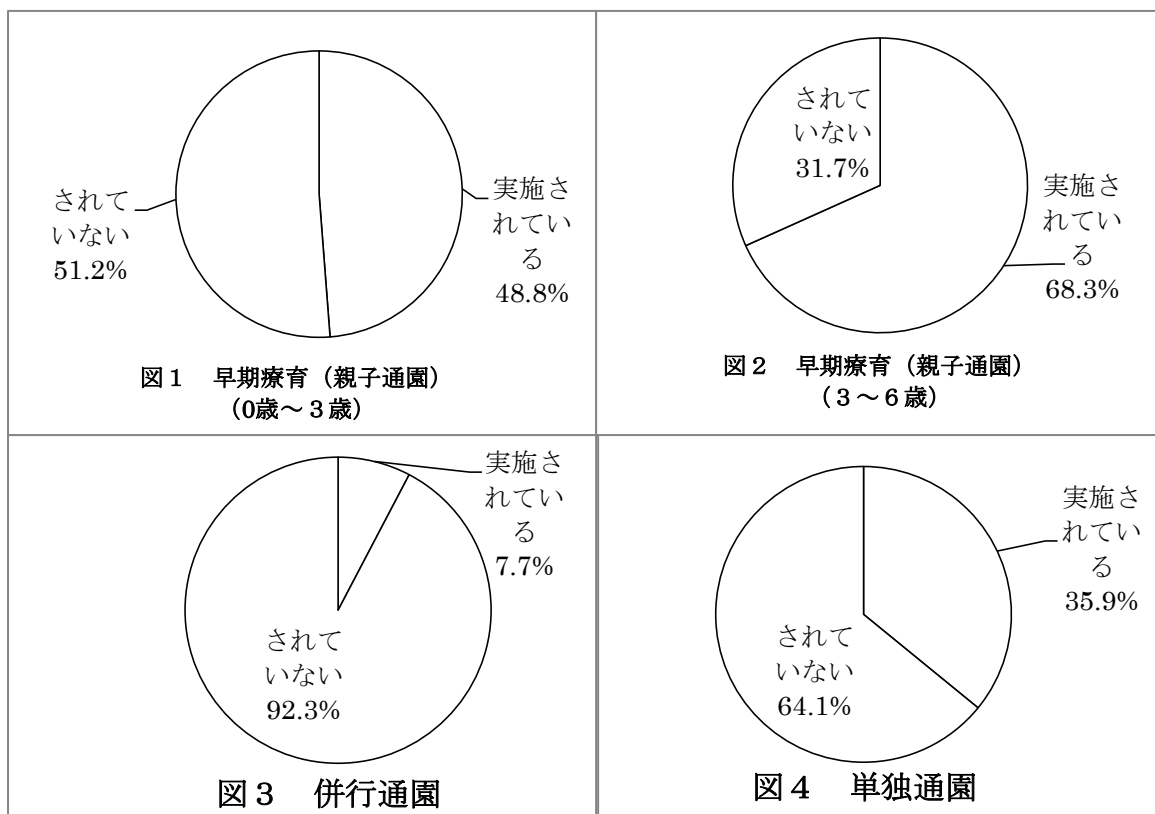
地域での重層的な療育システムの確立（第一支援機関＝児童発達支援事業、第二支援機関＝児童発達支援センター、第三支援機関＝総合センター）

→地域格差が問題！

#### 4. 今後期待される療育の場

・愛知の現状

※資料1



→この図より併行通園を行う施設は少ないことがわかる。つまり障害幼児は施設に通うか、一般の保育園・幼稚園に通うかのどちらかの選択をせまられていることがわかる。

#### ●療育センター「こころん」への取材

愛知県岡崎市にある NPO 法人こども発達を支援する会きららに属する児童発達支援・放課後等デイサービス事業

0～2歳の就園前のこども…親子療育

↓継続サポートプログラム

3歳～小学校低学年（主に発達障害児）…幼稚園・保育園・小学校に通いながら併行通園し、グループ療育を実施

<継続サポートプログラムの特徴>

- ・半期に1度療育の必要性について見直す期間を設ける
- ・連携（幼稚園・保育園）

何度も園に赴き、子どもの様子を伝え、保育者と共に援助方法を考える  
保育者を対象に研修を開催する

・連携（家庭）

療育が園と家庭との架け橋の役割を果たす

→依存しない療育・孤立しない療育・開けた療育の実現

## 5. まとめ

本研究を通して、療育の歴史的変遷から療育の場が隔離的な施設から地域へさらに現在は家庭へ園へとより身近なところへと変化してきたことがわかった。しかし、今も療育の場は障害のある子どもが通う場であり、療育機関として孤立している現状は変わっていない。さらに今は統合保育を取り入れる園も増えており、障害のあるこどもの生活の場が幼稚園・保育園へと変わろうとしている。そのため、これから保育と療育の連携、保育の中での療育に対する考え方、位置づけが重要なものになってくると考えられる。療育の場は療育の場として孤立したものではなく、園や家庭に密着したものが求められていると感じた。筆者は今後、幼稚園や保育園が主体となって療育を行ってはどうかと考える。保育と療育が一体に近い形で行われることが今後の療育の新たな形なのではないかと考える。

## <参考文献>

- ・斉藤公子『さくら・さくらんぼの障害児保育』p.3、pp、46～48、p.53、p.105、p.211、1982年。
- ・NPO 法人ももの木保育園 こども発達支援センター桃っこ『財団法人 日本社会福祉弘済会助成事業「どの子どもも育つ育てる療育」実践報告 ひとすじの道』、2011年。
- ・未次有加「戦後日本における障害児保育の展開—1950年代から1970年を中心に—」（大阪大学教育学年報 第16号）
- ・田中謙「戦後日本の障害幼児支援に関する研究—幼児グループから通園施設・事業への展開過程を中心に—」（東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科博士課程発達支援講座博士學位論文予備審査会資料、2012年）。
- ・茂木俊彦「序章 障害乳幼児への早期対応—その意義と課題」（転換期の障害児教育②、1999年）。
- ・阿部哲美「第9章 障害乳幼児の地域療育システムの構築」（転換期の障害児教育②、1999年）。